

# 知的障がい教育における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に関する研究

－生活単元学習の授業づくりを通して－

特別支援教育室 山内 望 川本 孝 山田 亜紀  
越智 宣和 玉乃井 美穂  
研究協力者 愛媛大学大学院教育学研究科教授  
檜木 暢子

## 1 研究の目的

平成29年4月告示の特別支援学校幼稚部教育要領小学部・中学部学習指導要領では、児童生徒の生きる力を育むために「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を行うことが示された。ただし、知的障がいのある児童生徒は、「学習によって得た知識や技能が断片的になりやすく、実際の生活場面の中で生かすことが難しい」等の学習上の特性があるため、それらを踏まえた上で、これまでの授業実践を基盤にしながら、学びの過程の質的改善を図ることが重要であると考え。

従前から、知的障がい教育では、特に必要があるときは各教科等を合わせて指導を行っている。なかでも、生活単元学習は、有効な指導の形態として特別支援学校等の教育課程に位置付けられてきた。そのため、これまでに生活単元学習に関する優れた授業実践等が多く報告されてきたが、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」（以下、「三つの学び」とする）の視点から授業改善を図り、成果をまとめたものは少ないのが現状である。

そこで、知的障がい教育における生活単元学習に焦点を当て、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の一助となる資料を作成し提供することで、特別支援学校等での授業の充実が図られると考え、2か年継続の研究として取り組むこととした。

## 2 研究の内容

### (1) アンケートの作成及び実施

生活単元学習の授業づくりの課題や授業改善のポイントを明らかにするために、アンケート調査を実施した。調査は、協力学校である県内の知的障がい特別支援学校（1校）に勤務する、知的障がい教育に4年以上携わった経験のある教員を対象とし、75名から回答を得た。

### (2) アンケートの結果及び考察

「主体的・対話的で深い学び」をしている子どものイメージに関する調査結果では、約8割の教員が「イメージを持てている」と回答していたが、「三つの学び」の実現程度と「三つの学び」をしている具体的な子どもの姿の調査結果を分析すると、捉え方の難しさが「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の順に増すことが分かった。よって、授業場面で目指す子どもの姿を教員間で共有できるように、新学習指導要領と調査結果を基に「三つの学び」の姿を分かりやすく示す必要があると考えた。

年間指導計画・単元計画・授業計画（以下、年間指導計画等とする）の工夫に関する調査結果からは、「三つの学び」の姿を引き出すために留意すべき事項をまとめることができた一方で、「育成すべき『資質・能力』を踏まえた年間指導計画の作成」、「地域資源の活用」、「ICTの活用」に関する教員の意識を高めていくことの重要性が示唆された。

授業づくりの課題に関する調査結果は、「対話的な学びを実現する手立て」と「深い学びを実現する手立てや評価」に関する回答が半数近くを占め、「対話的な学び」や「深い学び」をしている子どもの姿の捉え方の難しさを反映した結果となった。

## 3 研究のまとめ

本年度は、知的障がい教育における生活単元学習の授業づくりに焦点を当て、アンケート調査結果等から、「三つの学び」の具体的な姿や、それらの学びの姿を引き出すための、年間指導計画等を考える際のポイントや授業づくりの課題を明らかにすることができた。

次年度は、協力学校において、本年度の取組を基にしながら、授業づくりの課題解決を目指した授業実践を行うとともに、その取組をまとめ、生活単元学習における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の一助となる資料を作成し、各学校に提供していきたい。